

「環境王国」対馬へ スタディーツアー

市委託のUNCCA事業

発泡スチロールを蒸発、液化してリサイクルする対馬クリーンセンター中部中継所を見学



中学生10人、漂着ごみの観察や ツシマヤマネコの生態学ぶ

宇部市地球温暖化対策ネットワーク(UNCCA)が市の委託を受けて8月5〜7日に実施した長崎県対馬市へのスタディーツアーには、市内の中学生10人が参加。漂着ごみを観察したり、ツシマヤマネコの生態を学ぶなど、環境問題への理解を深めた。



烏帽子岳展望台から望むリアス式海岸の浅茅(あそ)湾の美しさに感激の参加者

対馬は「環境王国」と呼ばれるほど、自然豊かな環境の島。海流の関係で漂着ごみが多く、その量は年間1万5000立方メートルにもなる。その多くを占める発泡スチロールの処分場を参加者は見学した。

江戸時代、対馬藩の首都府中(現・厳原町)は、しばしば大火に見舞われ、その対策として1841(天保12)年以後、石組みの防火壁を造った。全国的にも貴重で、真正指定有形文化財に指定されており、歴史を学ぶツアーにもなった。

2012年に宇部市で開催された「地域から持続可能な社会をつくる」中国・九州地区環境先進自治体首長サミットで、熊本県水保市、対馬市、宇部市の3市が連携と交流を深め、地域から持続可能な社会づくりを行おうと共同宣言した。今回のツアーには、水保市の中学生もスタディーツアーで訪れており、現地で交流した。

参加した牛尾優花さん(西岐波中1年)は「漂着ごみの量は思った以上に多く驚いた」。野村友紀さん(上宇部中1年)は「以前対馬に住んでいた。久しぶりに来て自然がきれいなのに感激。海も青く泳ぎ通っていたが、ごみがあるのには少し悲しい気持ちになりました」と話した。



ツシマヤマネコの生息地を探して歩き



見つかったごみの持ち手を形内容物から分析

埴崎(おぼさき)海浜の漂着ごみを観察する参加者。海流の説明



対馬野生動物保護センターで飼育されているツシマヤマネコ(右)を観る



町並みも視察。石組みの防火壁の説明を受ける



初日の夕飯では水保市から同じスタディーツアーで訪れていた中学生と交流

